

《論文》

不登校が懸念される児童に対する予防的支援*
—メンタルフレンド活動の3年間からの知見—

Preventive Support for School Refusal
— A Case Study for Three Years —

大原 榮子**、佐治 恒佑***、戸田 和憲****
OHARA Eiko, SAJI Kosuke, TODA Kazunori

緒言

文部科学省が2016年に明らかにした不登校児童生徒の推移からは、2012年に一度、不登校児童生徒数は減少したものの、再び増加傾向にあることがうかがえる（図1）¹⁾。不登校児童生徒への支援活動は様々なものがあるが、そのひとつにメンタルフレンド活動（以下MF活動）が知られている。この名称で行われている活動としては、岡山県中央児童相談所が1989年から開始した不登校対策の活動（「ふれあいこころの友派遣事業」）に端を発している。今日では、全国の児童相談所や公的機関、大学院で、名称や方法に違いはあるものの広く展開している。筆者らも、民間ボランティア団体『メンタルフレンド東海』（以下、当団体と表記する）を組織し、これまで20年以上に渡って活動を行ってきた。



図1. 不登校児童生徒数の推移 (文部科学省、2016)

当団体では、支援の対象を小学生から中学生までの義務教育課程にある児童生徒としている。一般的にはMF活動は、“学校復帰”及び“登校支援”を目的とすることが多いが、当団体では、子どもたちの自立を支援することを目的に掲げている。また、子どもとの年齢的な差異を少なくなるように意図的に、活動者を大学生ボランティアに限定している。年齢差を少なくすることで、兄・姉のような立場で子どもたちと遊びを通して触れ合いやすくなるというメリットがある。加えて、MFと子どもとの関係性を『ナナメの関係』(図2)²⁾として捉え、これを維持できるように子どもとの事前面接や派遣するMFの趣味や性格等を吟味していくペアリング作業を重視するところも

* 2016年9月23日受理
** 名古屋学芸大学短期大学部
*** 心療クリニック・パティオちた
**** おの心のクリニック

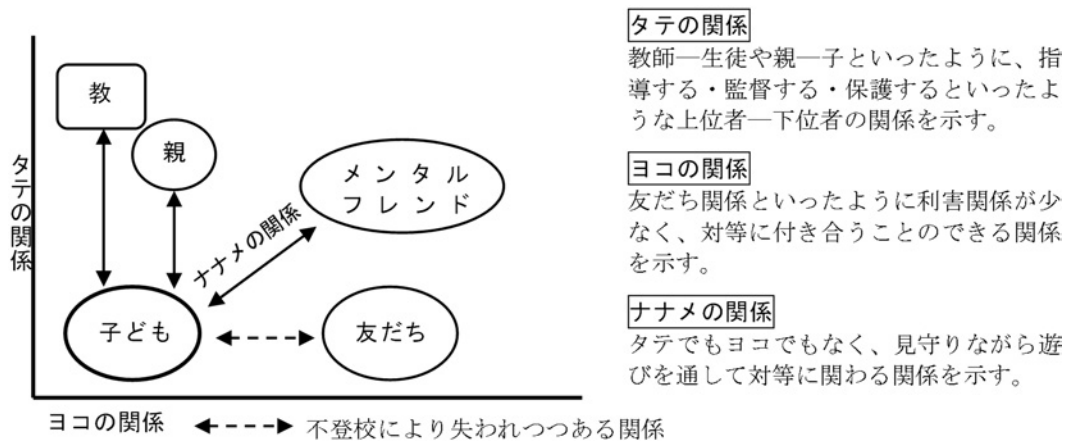


図2. ナナメの関係の図 (メンタルフレンド東海、2016)

当団体の特徴といえよう。その他にも、活動期間は一年とし、年度毎に一旦活動を終結し、子どもが次年度も MF 活動を希望した場合には、前年度とは別の MF の派遣を検討することとしている。これは、子どもが次の人と人間関係を築く学習となるように配慮したものであり、関係を深化させるだけでなく、横への広がりやねらいとしたものである。さらに、当団体では MF 活動で育まれた 1 対 1 の信頼関係を基盤として、集団活動でも安心感・安全感をもてるようになることをねらいとして、年に 2 回のデイ・キャンプを開催している。集団活動では、筆者ら世話人も参加者の一員として加わり、子どもたちとの関わりをもっている。

本稿では、当団体が行った MF 活動のうち、小学生のころ、同級生たちからいじめを受け、学校で安心感・安全感を持ちにくい状況にあった中学生 1 年生の男児 A に注目する。この事例において、MF 活動の要請があった時点では、A は不登校児童生徒ではなかったものの、「中一ギャップ」として知られるように、小学校から中学校に進学する段階で不登校が増加することが指摘されており、A はまさにその渦中にあった。

さらに、いじめによる不登校リスクについては、文部科学省や研究者たちがこれまでも多く論じているが、森田・清永 (1994)³⁾ の提唱した“いじめの四層構造とその価値観” (図 3、4) という視点は、いじめと不登校の関係を理解するうえでしばしば重要視されている。いじめとは、加害者—被害者の問題だけではなく、その場にはいじめを囃したてる観衆や、見て見ぬふりをしている傍観者といった場の構造ができあがっているという視点である。いじめの被害者は加害者との間だけでなく、学校の多くの場で、安らぎや居場所感、一体感を感じる事が難しいと指摘されている。危険で不安、孤独な学校生活から、心身を守る防衛反応として不登校に至る子どもの姿は、容易に想像できる。さらに森田 (1991)⁴⁾ では、いじめの被害者は学校への登校回避感情を高める可能性があるとして指摘していることから、いじめと不登校の関連は軽視されるべきものではないと考える。そのため、A は不登校が顕在化していく前の状況であるものの、不登校予備軍 (北大不登校調査チーム、2012)⁵⁾ や不登校の「潜在群」(森田、1991)⁶⁾ と捉えられることができ、今後不登校に至る可能性が高いと見立てた。

以上の状況に鑑み、これまで当団体は不登校児童生徒を対象に MF 活動を行ってきたが、A が置かれている状況及び中学校入学を目前にした時期であることから、不登校になりうる可能性を考え、本人、母親の希望とそれまでの相談にのっていたスクールカウンセラー (以下、SC と表記する) からの助言のもとに、MF 派遣の要請に応じることとした。

鈴木、上地 (2014)⁷⁾ は、いじめを病として捉えた場合、いじめへの対応を、予防医学における一次予防、二次予防、三次予防の三段階で捉える試みを行った。これによれば、「居場所のある

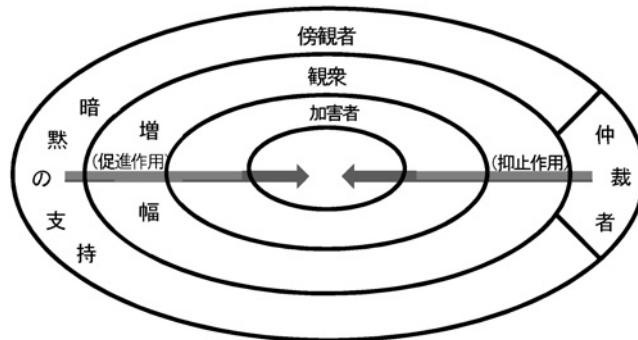


図3. いじめ集団の四層構造モデル (森田・清永、1991)

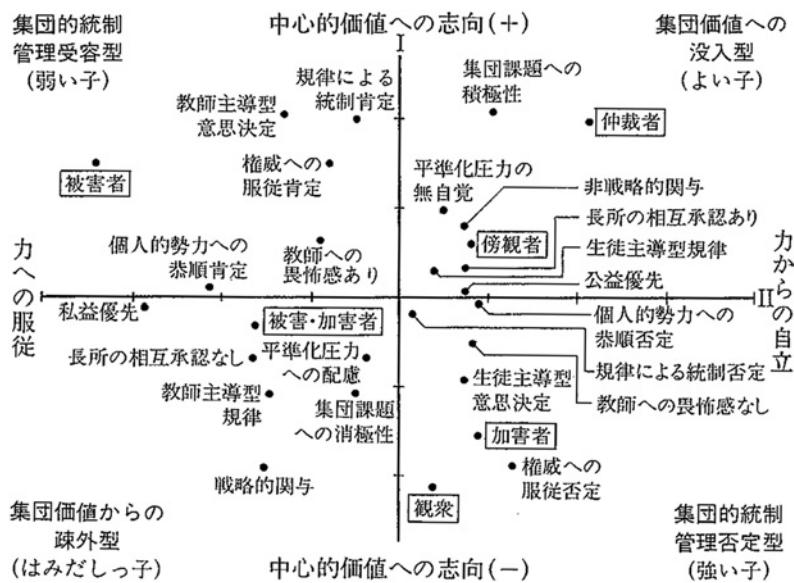


図4. いじめでの立場の違いとその価値観 (森田・清永、991)

集団作りや居場所作りや良好な友人関係を築くこと」はいじめに対する一次予防、「いじめに関するアンケート内容や調査方法の整備をし、生徒の変化や影響をいち早く把握していじめを早期発見し、対策すること」を二次予防、「いじめの発生後、被害を最小限に食い止め、元の状態に回復させ、その状態を保持すること」をいじめに対する三次予防に当てはまるとしている。この捉え方をMF活動に引き当てると、他で行われているMF活動は二次予防あるいは三次予防の意味合いが強いと指摘できるだろう。多くの他のMF活動の目的は、不登校児童生徒が再登校することであり、不登校に至った児童生徒への早期対応や再発予防として機能することがねらいである。言い換えれば、従来のMF活動は、問題が顕在化した後の支援方略として活用されることが多い。これらに対し、本事例は、不登校を未然に防ぐという目的でSCが支援を要請したものであり、一次予防としての意味があった。

さて、3年間にわたるAに対するMF活動はすでに終了している。この間、Aが登校しぶりや不登校になることはなかった。のみならず担任より「授業中に音読できるようになった」、「小学生に対する学習ボランティアに自ら応募することができた」等の主体性の高まりが報告された。具体的なMF活動の内容については後述の『方法と結果』にて詳述するが、MF活動中に、そうしたAの変化が観察されている。このことから本稿は、不登校の一次予防の成功例であるといえる。この事例を報告することは、不登校傾向が潜在化している子どもへの一次予防的支援のモデルケースとして意義があるといえる。

本稿では、事例の報告のみならず3年間の活動が終わって1年を経て、Aとその母親へのインタビュー結果も並行して報告したい。そこからは不登校への一次予防としてのMF活動の有効性を見出すことができるとともに、Aおよびその家族（母親）が、MF活動をどのように捉えていたかが明らかとなった。今後の不登校への一次予防において、当事者がどのような思いを抱いていたのかを知る事は、支援の在り方を考える上でも意義がある。

I. 方法

1. 導入の経緯

Aは、小学校卒業間際にSCより「Aは級友からいじめを受けており、このままでは不登校になるであろう」と見立てがなされた。中学校進学後もいじめが継続することを懸念したSCが、当団体に派遣を要請した。要請に対して筆者ら世話人が直接A本人の意思確認を行い、同意を得た。その後、SCよりAの家族構成（父、母、兄、Aの4人家族であり、父親の存在感は薄い）、兄が発達障害の診断を受けていること、級友からのいじめの内容及び、学校でのAの様子といった情報を得て、以下の支援計画を見立てた。

Aはいじめにあった経験から同性・同輩への不安感が強く、友人関係がもちにくい状況にあり、MF活動では安心・安全を感じられる構造作りが大切であると推察した。また、家族内で父親や兄といった同性の理想モデルが希薄であることや、MF活動内で思春期特有の性の関心を扱う可能性があったことを踏まえ、1年目のMF活動に男性のMFの派遣する方針をとることとした。

2. 事例の概要と活動の構造

家族構成：父、母、兄（発達障がい診断を受けている）、A（男児）の4人家族。

活動頻度：毎週決まった曜日に1～2時間、Aの自宅を訪問し、遊びを通して関わる。また、Aは当団体主催のデイ・キャンプにも参加した。さらに、同時期に開催された市教育委員会主催の宿泊を伴う校外キャンプにも参加している。市教育委員会からの要請を受け、この校外キャンプには当団体から筆者らとMF活動者も支援者として参加した。

活動期間：Aが中学校進学後に開始し、計3年継続した。

訪問MF：1年目の活動には男性のMFを派遣した。1年目の活動をふり返ったところ、性的関心が主要な問題として現れることはなく、MF活動では安心感のある構造の中でAの主体性を発揮できることが重要であると見立てを修正し、MF活動者の性別は問わないこととした。そのため、2、3年目には、女性のMFを派遣した。

SV体制：MFには、毎回の活動後に筆者ら世話人に活動報告書を提出することを義務としている。報告を受けた世話人は、報告ごとにスーパービジョン（以下SV）を行い、MF活動の支援を行った。筆者らはスーパーバイザーとして本事例にかかわりをもった。毎回のSVに加えて、MFには年に2回のケースカンファレンスでの事例発表を義務付けている。そこでは筆者ら以外の世話人（精神科医やSC、臨床心理士、大学教員）による集団SVも実施している。

3. インタビュー方法

MF活動終了後1年を経て、筆者らが母子それぞれにインタビューを実施した。インタビューは個別に実施し、約1時間を要した。また、録音することの了解を得て逐語録にまとめ、時系列順に主たる内容を抜粋した。内容の抜粋に際しては、共同研究者3名で行い、一致した内容のみ採用した。AとのMF活動は3年間にわたった。そのため、それぞれの年度のMFについて、男性MF-X

(1年目)、女性 MF-Y (2年目)、女性 MF-Z (3年目) と表記することとした。

4. 倫理的配慮

活動の内容およびインタビュー内容については、研究発表のみに用いることについて口頭で説明し、母子共に了解を得た。発表に際しては、個人が特定されうる情報は内容から除外することとした。

II. 結果

A との MF 活動の内容および A と母親へのインタビューの結果は表 1 のとおりである。インタビューで得られた情報の中で、その内容が MF 活動のどの時期におけるものかを把握できるものについては、活動時期と並べて表記した。また、インタビュー結果の欄では、インタビューアの質問を < > で示し、質問とその応答の内容を記載した。

1. MF 活動の内容

1年目の活動では、男性 MF-X が派遣された。1年目初期では、A は母親の陰に隠れて寡黙でおどおどとしていた。また、母親が A に対して過度に不安になっていると MF-X は感じていた。活動で A は「何をしたいかわからない」と不安げであったとされているが、LEGO や TV ゲームで遊ぶことを定番の活動内容としていった。1年目中期では、集団活動で MF-X の後ろに隠れ、他の MF と会話せずにひとり遊びするようすが見られた。やがて、グループ活動を通して「これをやりたい」と発言し、嫌がっていた行事にも MF-X から離れて参加できている。その後の活動でも、「次も行きたい」「楽しかった」と言っていた。1年目後期になると、声優になるという夢を打ち明け、大学生活や MF-X の将来の夢を知りたがる様子が見られた。また、活動後に友人と遊びにでかける約束を嬉しそうに報告する姿もあった。

2年目の活動では、女性 MF-Y が派遣された。2年目初期では、しばらくの間 A に不安・緊張があったと MF-Y は感じ取っている。定番となっていたゲームも「無理だと思う」と言い、消極的であった。しかし、MF-Y の誘いに応じて、A は MF-Y にゲームのやり方を教えたり簡単なものを選んだり配慮して関わりをもった。2年目中期に入ると、集団活動で A が「恥ずかしい」「やりたくない」と言いつつ、徐々に自己紹介に参加できるようなど、集団に適応していった様子があった。MF-Y は A が集団に馴染めていない年下参加者 B を気遣って付き添う姿が特に印象的である。2年目後期には、ゲームをせずに雑談する時間がとられた。MF-Y の大学に興味をもち、「高校生でも MF の活動ボランティアはできるのか」と質問している。MF-Y から当団体の世話人へボランティアの紹介を提案したが、A は「自分でするからいい」と答えた。

3年目の活動では、女性 MF-Z が派遣された。3年目初期には、視線も合わず口数が少ない様子であった。それが徐々に冗談を言うなど、声をあげて笑うようすがみられた。ゲームを通して協力し合い、A は重要なワンシーンを MF-Z に任せる姿があった。3年目中期では、MF-Z にゲームの難易度を選ばせ、MF-Z の希望を踏まえて“お互いが楽しめる”雰囲気が増えていった。MF-Z は A が気遣っている感覚をえた。中学3年生になった3年目後期には、高校や大学への関心を語る中で、進学先について「今の学校の生徒が進学しない学校を探して、そこに進学したい。遠くてもいい。」と自分の意志を語った。

2. A へのインタビュー

A は、1年目では、MF に最初に会ったときの印象として、緊張・不安があり、はじめての人と

話しをするのが苦手なMFともちゃんと話せないと思ったと言った。また、振り返って1年目の活動についての感想は、活動内容について「けっこう楽しかった。」と言っている。その中で記憶に残っていることについては、「何をやったか覚えていないけれど楽しかった。いつもはやらない活動ができて、いい経験になったと思う」と述べている。この1年目の活動終了時にはどんな気持ちだったかについては、「もうちょっと遊びたかった」と思い出しつつ話していた。

活動の2年目は、MFが女性に替わったことについて、特に大きな違和感はなく、楽しめたと振り返っていた。一方で、普段とは違う人と会うから「緊張が強かった」とも言っていた。このころに、MF活動を自分でもやってみたいと思った由だが、きっかけや理由は思い当たらないと言っていた。

活動の3年目も、2年目とは別の女性MFであった。「ちゃんと話せるのかな…」という気持ちがあったと言っている。

Aは、このインタビューを通してこの3年間を振り返った。MFとの活動を終えての心境は、言葉にすることは難しいと言いつつも、友だち感覚でMFが接してくれたことがよかった。もうちょっと遊んだりしたかったと言っている。また、活動を通してクラスの子たちと普通に話せるようになった。気持ちの変化はあまりないが、学校が少しだけ楽しくなったと、自身の変化を振り返った。最後には子どもたちを楽しませたい、その手伝いがしたいと答えていた。

3. 母親へのインタビュー

母親へのインタビューでは、初年度のMFが「男性で万々歳」といううれしい気持ちを語っている。「男の方には、男の方の見方があるはず。きっかけとしてよかった。」と語った。活動中に母親として感じていたことについては、「楽しかった経験とか、私には全然話してくれない。しつこく聞くと怒られますし……」と語った。Aの様子について尋ねると、「部活動の仲間に仲良くしてもらっていたみたい。」として、Aが「わくわくしていたのではないか。学校では、存在を認めてもらうことはなかったのではないか。」と言っていた。

2年目に、女性のMFが派遣されたことに対しては、「母性が強いのが気になった」とのことだった。女性は「守ってあげたい」と思ってしまいがちで、Aはお姉さんの母性に100%甘えてしまうため、厳しさも必要だと感じたことを語った。インタビューの中で世話人からよい変化がたくさんあったことを伝えると、「自分たちでやらなければ……。自分にもできることがあるというのが大きかったと思う。達成感を積み重ねていっていた。」と語った。また、Aについて、「守られることはあっても、守ることはなかった」として、MF活動がAにとって自信になったのではないかと考えていることがわかった。また、Aは体も小さく、できることも少ない子だから、周りもすぐに手を出してきたことを母親は述べていた。

3年目の活動の内容については、守られてばかりではなかったことに、びっくりしたと言う。Aが自分で進路決定したことについても、「新天地でやっていきたいってことかな。」と語っていることが伝えられた。また、後輩Bが病気で入院したことについても「Bくんの力になってあげたかったのではないか」と語り、母親には秘密にしていたが、Aが自分で決めたことを連想した。

MF活動を終えた母の想いとしては、「感無量です。いいことばかりでなくても、乗り越える力がついた。自分で選んで頑張れるようになった。」と言い、「今の姿は想像できなくて、一生守ってもらわなくてはいけない子になるのかなと思っていました。親は守ることしかできない。親ではなくて、第三者から認めてもらうことが必要だった。Aの中で自己肯定感ができた。独り立ちの時期かな。」とAの成長を母親は語った。

表1. メンタルフレンド活動の内容とA および母親へのインタビュー結果

	メンタルフレンド活動の内容	A へのインタビュー結果	母親へのインタビュー結果
1年目 (男性メンタルフレンドX)	<p>〈活動前期〉</p> <p>メンタルフレンドX (男性) とA、母親と初めての出会い。Aはおどおどして母親の陰に隠れるように寡黙にみえた。母親はAの学校での様子を詳細に知っており、過剰な不安をAに抱いているように感じられた。</p> <p>活動初期、Aは「何をしたいかわからない」と不安そうにして、Xから何か提案がなされるまで待つことが多い。XはAからの提案を促し、ともに困ることをする。LEGOやTVゲームをすることが定番となっていった。</p>	<p>〈最初に会ったときの印象〉</p> <p>緊張・不安・心配があった。知らない人と話したりするのが苦手なで、フレンドともちゃんと話せないと思った。</p> <p>〈一年目の活動について〉</p> <p>(活動内容について) けっこう楽しかった。</p>	<p>〈初年度のMFの印象〉</p> <p>男性で万々歳。男の方には男の方の見方があるはず。きっかけとしてよかった。</p>
	<p>〈活動中期〉</p> <p>集団活動ではAはXの後ろに隠れ、他のMFと会話をするともなく、ひとり遊びを始めることがあった。しかし、XとAを含めた4人グループで活動をしていく中、初めて自発的に「これやりたい」と言ったり、嫌がっていた行事にも、Xから離れて挑戦したりする姿がみられた。集団活動の経験についてAは何度も「次も行きたい」「楽しかった」と活動中に話した。</p>	<p>〈その中で記憶に残っていること〉</p> <p>何やったか覚えてないけれど楽しかった。いつもはやらない活動できて、いい経験になったと思う。</p>	<p>〈活動中に母親として感じていたこと〉</p> <p>楽しかった経験とか、私には全然話してくれない。しつこく聞くと怒られますし…</p>
	<p>〈活動後期〉</p> <p>将来は声優になりたいと打ち明け、大学生活や、Xの将来の職業について質問をすることが活動中に増えた。また、活動途中にAに電話があり、嬉しそうに「この後、友達と1時から遊びに行くことになった」と話した。</p>	<p>〈一年目の活動終了時の気持ち〉</p> <p>もうちょっと遊びたかったな……。</p>	<p>〈A君の様子〉</p> <p>部活動の仲間に仲良くさせてもらっていたみたい。わくわくしていたんじゃないかな。学校では、存在を認めてもらうことはなかったんじゃないかな。</p>

2年目 (女性メンタルフレンドY)	〈活動前期〉 新しくMFとの活動が開始してしばらくの間は、不安・緊張がみられ、Yからのゲームをしようという提案にも「無理だと思う」と消極的だった。しかし、Yの誘いに応じて、やり方を教えたり簡単なものを選んだりと配慮しながら関わりをもった。	〈二年目の女性MFの印象〉 特に（一年目と）違いはなかった。	〈二年目の女性MFの印象〉 母性が強いのが気になりました。女性は「守ってあげたい」と思ってしまいがちなので。Aはお姉さんの母性に100%甘えてしまう。厳しさも必要。
	〈活動中期〉 集団活動で、最初、「恥ずかしい」「したくない」と言っていたが、徐々に自己紹介に参加するなど集団へと適応できていった。特に印象に残る場面は、集団に馴染めずにいた年下の参加者Bを気遣って、傍に付き添う姿であった。また、MFの通う大学の大学祭に母子で参加した。	〈二年目の活動について〉 楽しかった。 普段とは違う人と会うから緊張が強かった。	自分たちでやらなきゃ……。自分にもできることがあるっていうのが大きかったと思います。達成感を積み重ねていっていた。Aは、守られることはあっても、守ることはなかった。自信になったんじゃないかな。体も小さく、できることも少ない子だから。周りもすぐに手を出してきた。
	〈活動後期〉 MF活動中にAは、「のんびりタイム」と言って、ゲームもせずに雑談する時間をとるようになった。話の中でAはYの通う大学について興味をもった様子や、「高校生でもMFの活動ボランティアはできるのか」と質問することがあった。Yが世話人への紹介を提案したが「自分でするからいい」と答えた。また、MF活動外であるが、学校からAが小学生対象とした学習ボランティアに参加したいと自ら申し出があったことの報告が母親にあった。	〈ボランティアに興味が出た理由〉 きっかけや理由はないけど、自分もMF活動をやってみたいと思った。	

3 年 目 (女 性 メ ン タ ル フ レ ン ド Z)	<p>〈活動前期〉 新しいMFとの活動の初回では、視線も合わせず、口数も少ない様子がみられた。徐々に冗談を言うなど、声をあげて笑う様子がでてきた。ゲームを通した関わりの中で、協力し合い、重要なワンシーンを「やってみなよ」とZに任せる姿があった。</p>	<p>〈三年目の活動について〉 ちゃんと話せるのかな…</p>	
	<p>〈活動中期〉 「どの難易度のゲームがいい？」とZにたずねるなど、Zの希望を踏まえた“お互いが楽しめる”雰囲気が増えてきた。Zは気遣ってもらえているという感覚がした。大学の学園祭に今年も来るのかとZが尋ねると「行けたら行く」と言い、その後、学園祭に参加するAの姿があった。</p>		
	<p>〈活動後期〉 ゲームをしつつも、雑談が増えた。高校や大学への関心を語り、特に高校受験について、「同じ学校の生徒が進学しない学校を探してそこに進学したい。遠くてもいい。」と言い、その後、自分の意志で進学先を決定したことが語られた。 MF活動外の情報として、学校から、「Bの入院を知ったAが、自分で病院に電話をしてお見舞いにでかけた」という報告が母親にあった。</p>	<p>〈MF活動を終えた後の心境〉 (MF活動について) 言葉にするのは難しいけど、友だち感覚で接してくれてよかった。もうちょっと遊んだりしたかったです。 (自身の変化について) クラスの子たちと普通に話せるようになった。気持ちの変化はあまりない。学校が少しだけ楽しくなったかな…</p> <p>〈何か一言〉 子どもたちを楽しませたい、その手伝いがしたい。</p>	<p>〈活動の内容を振り返って〉 守られてばかりじゃなかったんですね。びっくりしました。</p> <p>〈進路選択について〉 新天地でやっていきたいってことかな。(Bが病気で入院したことについて) Bくんのことも、私には言わなかったけど気になっていたみたい。Bくんの力になってあげたかったんじゃないかなあ。だから、MF-XさんみたいにBに限らず力になってあげたいのかもしれない。</p> <p>〈MF活動を終えて〉 感無量です。いいことばかりでなくても、乗り越える力がついた。自分で選んで頑張れるようになった。 今の姿は想像できなくて、一生守ってもらわなきゃいけない子になるのかなと思っていました。親は守ることしかできない。親ではなくて、第三者から認めてもらうことが必要だった。Aの中で自己肯定ができた。独り立ちの時期かな。</p>

Ⅲ. 考察

1. A へのインタビューから得られた知見

A は MF 活動をどのように体験していたのかを、インタビューから考察する。まず、「何をやったか覚えてないけれど楽しかった。いつもはやらない活動ができて、いい経験になったと思う。」というインタビューでの A の言葉からは、何をしたのかは A にとってあまり重要な観点ではなく、MF と A との間に生じた「楽しい」という感情体験が、彼にとって今も強く残り続けていることがうかがえる。このことは、不登校の一次予防として、A にとって何か特別な介入が求められているのではないと指摘できる。同様に、MF 活動における子どもと MF の二者関係の中においても、「何をしたか・どんな遊びをしたか」ではなく、そこで「どのような情緒的な交流が行われていたか」という感情体験に焦点を当てることが重要であると考えられる。

また、A は自身の変化について「クラスの子たちと普通に話せるようになった。気持ちの変化はあまりない。学校が少しだけ楽しくなったかな…」と話している。言葉少なではあるが、このひとことの背景には「これまでは普通にクラスの子たちと話せなかった。」という自己評価の低さがうかがえる。このことについて、A は「友だち感覚で接してくれてよかった。」とインタビューで語っていることを踏まえると、A にとって MF 活動は、ナナメの関係でありながら、タテの関係よりもよりヨコの関係に近いものであり、クラスメイトと関係を作る予行練習としての効果があったものと捉えられる。そして、学校での友人関係を構築できるようになったことで、A はクラスメイトと対等になれたと実感できたのではないだろうか。MF 活動は潜在的に学校での対人関係で安心感・安全感をもちにくい子どもの支援になると確信した。

以上のことから、

- 1) MF 活動は「何をするか」よりも「2人でどのような感情体験を生み出すか」が重要である
- 2) いじめにより不登校になりうる子どもは、クラスメイトと自身を比較して「普通じゃない(劣等な)」自己イメージを有しており、劣等感を補償するためには対等に近い関係で「楽しめる」時間を過ごす

以上2点が重要であるといえよう。

2. 母親へのインタビューから得られた知見

母親のインタビューからは、子どもイメージが変化したことが読み取れる。つまり、MF 活動以前は「守られることはあっても、守ることはなかった。」「体も小さく、できることも少ない子だから。」といった発言からもわかるように、母親にとり A は弱々しく保護しなければいけない子として映っていたことがうかがえる。そのようなわが子に対して強くなってほしいという思いは持ちつつも、「女性は母性が強い」、「親は守ることしかできない」という母親の言葉のように、強い保護的な関わりをとっていたことが推察される。第一子である長男が発達障害であるという家族背景は、母親にとって、子どもは保護しなければいけないものだ、というイメージを強くさせたであろう。それに加えて、A へのクラスメイトによるいじめが発覚して、その事実が学校から小学校卒業間際に伝えられたという経緯を考慮すれば、A をより一層保護し、守らなければいけないという気持ちが母親の中で増すのは当然である。そこには、母親自身の傷つきもある。傷つきながらも精一杯わが子を守ろうと努め、「一生護ってもらわなければいけない子になるのか」と不安を募らせていた姿が推察される。

おそらく、家庭で母親の保護的な関わりに対して A は甘えてしまい、弱々しい姿が固定化されていき、学校場面ではおどおどとした A の姿はからかひの格好の標的となり、いじめの事実が母親の保護的態度をより強化する……というような悪循環があったものと推察する。そのため、初年

度のMF-Xに対し、母親が「男性で万々歳。男の方には男の方の見方があるはず。」と述べたように、家族以外の男性モデルが現れたことを歓迎したのではないだろうか。

そして、AがMF活動内容を母親に秘密にしたことや部活動・ボランティアへの参加を決めるなど、自らの力で活動範囲を広げていく姿をみて、母親に当初あったAの弱々しく保護しなければいけないイメージが変化していったことがインタビューから読み取れる。それは「独り立ちの時期」「守られてばかりじゃなかったんですね。びっくりしました。」とインタビューにて述べたように、『誰かを守ることでできる子』、『自分で判断し、選択できる子』といった力強い変化として捉えられている。さらに、副次的な効果ではあったが、MF活動をインタビューという形で振り返ることで、特に母親にとってはAの変化や活動の中での新たな成長の一面を再認識する機会となったといえる。

以上のことから、MF活動はAの主体性を高めるだけでなく、母親の子どもイメージを「保護してあげないといけない子」から「誰かを守り、自立を目指している子」という肯定的なものへと変化させたことがうかがえる。変化を支えた要因として、母親が感じ取っているのは、「Aが親以外の第三者から認めてもらうこと」で、Aにも「自分にもできることがある」という自己肯定感の高まりにつながるものととらえていたことがわかった。

すでに述べたように、MF活動においては活動内容の選択も不安の解消方法も、AとMFがともに模索しながら解決の糸口を見つけていった。筆者らが『ナナメの関係』の持つ意味の重要性がここにある。すなわち、支援者が対象児童生徒の不安や心配を解決することではなく、子ども自身の力を信じて「ともに困る」姿勢をもち続けることで子ども自身が自己肯定感を高め、主体的に活動できる子どもへと成長することにつながっていく。

3. まとめ

これまでのAおよびその母親へのインタビューと3年間のMF活動をまとめていく。

MF活動は、いじめをきっかけとしてSCから当団体に依頼されたことに始まる。MF活動初期のAは、母親の陰に隠れておどおどとして見えた。MF-Xが母親の過剰の不安を感じ取っていることから、Aも母親も共に強い不安な状態にあり、母子の一体化があったものと推察される。つまり、Aは誰かの保護下でしか安心感が得られない状況にあり、母親もまたAをひとりにすることに強い不安感を抱いていた可能性があった。母親の不安の背景には、長男が発達障がいであり、保護しなければならないという意識が働きやすい家族背景があったことも大きいだろう。Aにとって、自立していく力強い男性モデルにはなりにくかったと思われる。しかし、Aのおどおどとした姿は、クラスメイトたちには奇異に映っていたことだろう。からかいの対象となりやすく、いじめの増幅の一要因となっていたと思われる。そこで、MF-XはMF活動について「何をすればいいかわからない」と不安がるAに対して、Aの主体性を尊重して粘り強く提案を待った。Aの困惑を、MFが主体となって解決することもできたであろうが、「ともに困る」経験をすることで、AはやがてTVゲームの定番化という解決策を発見している。同じ目線で共にその場の雰囲気や状態を味わうことを通して、Aは「〇〇をやりたい」というように自分で考え、行動することが増えていった。MFは同年齢の級友とは違い、困っているAが自分の力で解決することを信じて待った。これはまさに、ヨコでもなく、しかし解決策を教えるタテの関係でもない「ナナメの関係」の強みといえる。

また、AがMF活動の内容を母親にあえて秘密にしたことは、母親から自立しようとする行動と捉えることができる。2年目からの活動においては、女性MFにゲームのアドバイスをすることなどで“お互いが楽しめる”関係を築いたことやAが自らボランティアに出かけるなど、自己効力感の高まりと対人関係様式の変化がうかがえた。さらに3年目では、進路選択を自己決定したり後

輩 B のお見舞いに行ったりと、母親から離れてひとりで活動する姿が多くなり、家庭から生活の中心を社会へと広めていったことがうかがえる。つまり、A は MF 活動の中で安心感のある関係性を創りあげ、そこで自信をもてるようになったことで、自立へと向かって成長していった。A はインタビューで、「普通にクラスメイトと話せるようになった」と語っており、A の自立的な態度は、MF 活動のみならず学校でも発揮されていることがわかった。また母親も「独り立ちの時期」と捉えており、A の主体性が発揮されることを歓迎する様子がある。そこには、“誰かの保護下でなければ安心・安全を得られない A” も “A をひとりにすることに不安な母親” の姿はない。A の自己イメージは“同級生にからかわれて普通に話せない自分”から“クラスメイトと対等である自分”というような力強いものへと変化したと推測される。こうしたことから、悪循環を維持する母子の一体化やいじめを増幅する A の態度を弱体化させ、登校回避感情の高まりを減じ、不登校に至ることを未然に防ぐことにつながったと考える。このことを、森田・清永 (1991)³⁾ の『いじめでの立場の違いとその価値観』(図 4) に照らし合わせてみると、力への服従から力からの自立へと A の変化をみることができる。

さらに、小学生への学習ボランティアに自ら応募、参加をしたことや「子どもたちを楽しませたい、その手伝いがしたい。」とインタビューで語ったこと、B のお見舞いに自ら行ったことなどの行動から、A は MF のように人の役に立つことを願っていることがうかがえた。ここからは、MF を理想の大人イメージとして取り入れていることが推察される。それまでの A は、母親の保護の元でしか動けない子どもであったが、活動を通して、MF のように振る舞うことは心地よいのだと自らの価値規範を拡大していったのだろう。このような成長モデルの獲得という点でも、A にとっての MF 活動は大きな役割を担っていたと考えられる。

IV. 結語

いじめに合っていた小学生男児 A の相談を受けた SC は、本人の性格および家族環境といった状況を踏まえ、進学後の不登校を懸念した。そこで当団体への依頼がなされ、学校内の対応だけでなく、支援のチーム体制が設けられることとなった。仮に、いじめが継続・増幅したとするならば、A は登校回避感情を高めて、いずれ不登校になった可能性がある。この事例では、家庭訪問による MF 活動によって A は、MF との関係の中で、自己肯定感を高めていき、進路の自己決定や友人の輪を広げ、3 年間にわたって登校しぶりや不登校は見られなかった。

文部科学省は近年「チームとしての学校」⁸⁾ という言葉を掲げている。そこでは、「チーム学校」を実現するための視点とその方策として挙げられている視点 1 「専門性に基づくチーム体制の構築(教員、事務職員、専門スタッフ等が連携・分担し、それぞれの専門性を発揮できる体制の構築)」のように、いかに専門家が子どもの指導に関わり、教員と協働できるかが問題解決において重要であると考えている。いじめにあった子どもの一次予防として SC への相談があり、その後、外部団体としての当団体への依頼があった。SC は、常に A およびその母親との面接を継続しながら、外部支援者である MF のスーパーバイザーを務めていた。これはまさに、SC がその専門性を発揮し、子どもの支援を外部団体と連携しながら、チームで支援した事例である。

引用文献

- 1) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課：平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について、25、2015
- 2) メンタルフレンド東海編著：不登校児を支えるメンタルフレンド活動、11、黎明書房、2016

- 3) 森田洋司, 清永賢二: 子どもたちの価値観と価値基準, いじめ—教室の病い, 141-164, 金子書房, 1994
- 4) 森田洋司: 第7章 問題行動の重複性 第1節いじめ問題と不登校, 「不登校」現象の社会学, 193-197, 学文社, 1991
- 5) 北大不登校調査チーム: 都市部における不登校者支援の現在 札幌市の支援行政とフリースクールへの調査から, 公教育システム研究, 11, 65-100, 2012
- 6) 森田洋司: 第5章 不登校への行動化と不登校の理由 第1節登校回避感情, 「不登校」現象の社会学, 146-148, 学文社, 1991
- 7) 鈴木香織, 上地勝: 日本におけるいじめに関する研究の現状と課題一次予防の視点から見たいじめ対策, 茨城大学教育学部紀要, 63号, 509-526, 2014
- 8) 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室: 3. 「チームとしての学校」を実現していくための具体的な改善方策, 2016

参考文献

- 樋田大二郎: 学校病理研究の動向—非行, いじめ, 不登校の研究の学校化と多様化—, 犯罪社会学研究, 38, 199-204, 2013
- 森田洋司: いじめとは何か 教室の問題, 社会の問題, 中公新書, 2010
- 文部科学省初等中等教育局: 不登校重大事態に係る調査の指針, 2016